2019/1/25　中野教会　「聖書の学び」

　　　　　　　　　　　**「新旧約聖書・中間期の歴史」**

　十二小預言書を終え、新約聖書の「主イエスの喩え話」に行く前に、旧約聖書から新約聖書への橋渡しの時期になる所謂中間期の歴史を学んでおきたいと思います。今日はその第一回で中間期の歴史そのものにつき概略説明いたします。資料にある年表はメツガーというドイツの神学者の翻訳『古代イスラエル史』の付属年表に私が追記したものです。簡便なかつ要領を得た年表ですので、中間期の学び時の携帯品としてお使い下さい。

以下の説明は、この本の翻訳者である山我哲雄氏の『聖書時代史・旧約篇』に主に依拠しています。説明のスタートはBC445のエルサレムの城壁再建完成です。エズラ、ネヘミヤによるユダヤ教共同体の形成の一応の終結です。ペルシャの属州としての立場は継続しており、ユダヤ総督もいましたが、ユダヤは自治が大幅に認められ、大祭司・長老組織による行政が行われていました。所謂神聖政治ではなく、大祭司の役割は基本的に祭儀的なことに限定されていた、と考えられます。ユダヤの地はイェフド（ユダ）と呼ばれ、他のシリア属領に囲まれていました。北のサマリヤ、東のアンモン、西のアシュドド、南のイドマヤ、イドマヤの死海を挟んだ東のモアブ、イドマヤの更に南のナバテアです。

エズラ、ネヘミヤの宗教改革運動の結果、ユダヤには自らを「聖なる種族」とする意識が確立し、神殿礼拝と律法遵守を通じた宗教原理によって民族を維持する、という独自な民族共同体の基礎が据えられていきました。他方で、流通し始めていた貨幣はアッティカのドラクマ硬貨を模倣したもので、ヘレニズム文化の影響が及んできていました。特記すべきことの第一点はサマリアとユダヤの対立です。サマリヤ人は自らもヤハウェ崇拝者と言っていましたが、ユダヤ人は北王国滅亡後アッシリアによって強制移住させられた異民族の子孫として、ユダヤ人共同体からは排斥されていました。サマリヤ教団は独自の聖書を持っており、今も、シケム、今のナブルス周辺に存在し、ゲリジム山で独立した礼拝を守っている、ということです。新約聖書で、主イエスの良きサマリア人の話としてでてきます。ユダヤ人とサマリヤ人の対立は、ペルシャからの帰還の民の神殿再建を妨害した頃から始まり、第二神殿、神殿城壁の完成の頃には決定的になり、宗教的にはその対立は今にまで至る、という訳です。

もう一点申し上げておくべきことはエジプト・エレファンティネ島のユダヤ人のことです。ユダヤ人はユダ王国滅亡後、エジプト、ナイル川中流にあるエレファンティネ島に移住しました。ここは今はアスワン・ダムがあるところです。ここでのユダヤ人は「ヤウ」とか「ヤフ」という名でヤハウェを崇拝し、他方でアシャム・べテルなどの女神も崇拝しており、宗教混淆が進んでいたとみられます。彼らはエルサレム神殿と緊密に連絡をし、BC419に古式に則った過越祭を行うよう指示された文書が残っています。「過越しのパピルス」と言います。アラム語文書です。彼らはペルシャ王の臣下であったため新興のエジプト第29王朝によって滅ぼされた、と考えられています。

この時代の覇者ペルシャはBC6c頃からギリシャの攻勢を受けるようになります。BC490にはペルシャのヨーロッパ侵攻をギリシャの都市国家連合が阻止します。これがマラソンの起源で有名なマラトンの闘いです。BC480にはサラミスの海戦でペルシャ王クセルクセスI世が敗北します。しかしギリシャの都市国家は相互に戦い、東への結束した進出はしませんでした。BC4c半ばにギリシャ北東部のマケドニアが貴族戦士集団として力をつけ、長槍を武器とする農民の歩兵軍団と貴族たちの騎兵隊を組み合わせBC338にはカイロネアの戦いでポリス連合軍を破り、ヘラス同盟を打ち立て、ギリシャ地域を統合しました。その王フィリッポスの死後、その子のアレキサンダー大王があとを継ぎ、ペルシャ遠征に乗り出しました。まず小アジア、今のトルコを占領し、BC333年、イッソスの闘いで、ペルシャ王ダレイオスIII世を退け、シリア、パレスチナを服従させ、BC332にはエジプトのメンフィスに無血入城しました。その時、パレスチナでは都市国家ティルスとガザが数か月籠城の上抵抗しました。サマリアも若干の抵抗をしましたが占領されました。ユダヤは抵抗の気配はありません。エジプトの神官は、彼をアモン神の子と讃えました。ペルシャからの解放者と考えた訳です。ここから再びペルシャに向かい、BC331にガウガメラの闘いでダレイオスIII世に決定的勝利を収めます。ここで230年にわたるアケメネス朝ペルシャは滅亡しました。この過程はダニエル書8章の黙示的な幻に反映している、と言われています。アレクサンダーは目的が達成されたとしてBC330に同盟軍を解散し、ギリシャ人将兵を帰国させ、マケドニア将兵とアジア人傭兵を率いてペルシャ北方のパルティア地方に出発しました。そして遂にBC326インダス河を渡ったが、そこで兵士は士気をくじかれそれ以上の前進を拒否しました。BC324に軍はペルシャの首都スサに帰還しました。アレキサンダー大王はBC323、アラビア遠征の準備の中、熱病で死にます。32歳の若さでした。疾風の如く走り抜けたアレクサンダー大王の活躍はその後の語り草となり、西欧文明の中に残って行きます。マケドニアの名前は今も国名において争いのねたとなっており、ユーゴ解体のあと「マケドニア」が独立しましたが、ギリシャがその名称につき抗議を続け、先般「北マケドニア」に名称変更することで両国が合意しました。しかし、マケドニア国民は納得しておらず、国民投票で否決される可能性もあります。歴史上のマケドニアは北ギリシャから現在のマケドニア南部をカヴァーする地域でした。2300年程前の歴史を今も引きずっている訳です。

このアレキサンダーの大帝国は政治的・経済的意味よりギリシャ文明を東に伝播したという意味で重要です。彼は、行く先々で「アレキサンドリア」という町を作り、ギリシャ人を入植させていったのです。彼らは、地場に定着し、混血し、ギリシャ文化とオリエント文化を結合させた独特の文化を形成していきました。これをヘレニズム文化と言います。これが世界市民主義（コスモポリタニズム）を形成しました。ユダヤに関しては、アレキサンダーも眼中になく、ユダヤ人の方でも神殿礼拝、律法遵守が保証される限り、我関せず、の態度でしたが、人的・物的交流を通じ、ヘレニズム文化の影響は抗しがたく、多方面での変化が起き始めていました。パレスチナには多くのギリシャ系兵士、役人、商人が住むようになり、各地にギリシャ系住民のための居住地、軍事駐屯地が作られていきました。ギリシャ文化が東方へ、という意味で世界史における文化史上の重大屈折点でした。ヘレニズム文化と言い、日本にも影響を与えています。東大寺正倉院に文化遺産が残っています。

もう一点述べておきたいのは、BC6-5cというのが思想史上重要な時代であった、ということです。まずBC6c初にペルシャで「世界最初の一神教」とも言われるゾロアスター教が確立します。これは祭儀に火を使うので「拝火教」とも呼ばれます。その少しあとジャイナ教がインドで生まれます。これは生き物を殺さないので有名で、一部の信徒は後に白い衣を常に着て歩くグループとなったりしました。イエス誕生の時の東方の三博士と言うのはゾロアスター教の天文学者かジャイナ教の僧侶かもしれない、といわれています。そして東方ではBC6cの末からBC5cにかけて孔子が登場します。孔子は儒教の祖です。また老子も現れます。彼は道教の祖とされています。更に5cの後半にインド北部に釈迦が生まれます。言わずと知れた仏教の祖です。注意したいのはBC1c頃に生まれた大乗仏教はブッダの教えとかなり違っており、初期仏教は、悟りによりヒンドゥ―の輪廻から脱し、涅槃の境地に達する、という哲学的宗教であったと言われています。そしてユダヤではエズラ、ネヘミヤによる宗教改革があり、神殿礼拝と律法遵守を旨とする後期ユダヤ教が成立するのです。いわば、BC6-5cは世界全体における新思想発生の時期であった、といえるでしょう。

ここまでがペルシャ・ギリシャ時代とも言うべき一区切りです。聖書に関連しては、「モーセ五書」即ちトーラーと称せられる文書がほぼ確定したと考えられています。BC622のヨシヤによる宗教改革以降の聖書確定作業の成果です。そしてアレキサンダーの死後、大帝国は分裂し相互に戦うディアドコイ戦争がはじまります。その結果、マケドニア・ギリシャはカッサンドロス朝、今のブルガリアの方のトラキアと小アジアはリュシマコス朝、エジプトはプトレマイオス朝、シリア、メソポタミア、ペルシャはセレウコス朝となりました。このうち、プトレマイオス朝エジプトとセレウコス朝シリアが2大勢力であり、6度にわたる「シリア戦争」が長期間戦われます。BC274~168で約100年です。最初はカナンの地の近辺ではエジプトが優勢であり、BC301頃、ユダヤはプトレマイオス朝の支配下に入ります。そしてエジプト軍は多くのユダヤ人をエジプトのアレキサンドリアに連れ去りました。そして、この町はこの後、ディアスポラ・離散のユダヤ人最大の町になり、人口百万をこえるヘレニズム世界最大の都市になります。今のNewYorkみたいなものです。ヘレニズム文化の影響下にありましたから公用語はギリシャ語です。そしてここで、旧約聖書のギリシャ語訳（「七十人訳・セプテュアギンタ」が成立します。旧約聖書偽書「アリステアスの手紙」に十二支族から各6名合計72名の長老が集まり七十二日で翻訳したと言われているため、この名がついています。このプトレマイオス朝エジプトの時代は、エジプトのユダヤに対する支配も緩く、大祭司によるユダヤ人自治が広く行き渡っていた、と考えられています。

この時期に、一方ではヘレニズム文化による国際性の影響から、異邦人におけるヤハウェ信仰にも開放的姿勢が生まれてきています。文書としてはユダヤ人聖書で「諸書」とされている中の「ヨブ記」「雅歌」、またその後、知恵文学と言われる「伝道の書」、外典の「トビト書」等がこの時期のものと推測されています。その他「ヨナ書」、「エステル記」、「第二・第三ザカリヤ書」、「歴代誌」が成立したのもこの時期と推測されています。

この頃のコイレ・シリアとよばれたパレスチナ地方の経済は貨幣流通が拡大しており、また地中海岸の諸都市を窓口とした貿易も盛んになって行きました。エジプトによる税金の徴収はありましたが、政治的には個々の都市国家や地域が自立的に行動をしていました。カナン地域ではこれによって財を築いたトビア家が勢力を拡大しました。エジプトと交渉し、徴税権を獲得し、巨万の富を蓄積するまでになりました。ユダの地は大祭司がそのトップにいる政治体制でしたが、大祭司職を代々継承していたのはオニアス家でした。この両家の対立がだんだん強くなっていきました。トビア家はヘレニズム化に前向きであり、カナンの地をギリシャ風の地に代えて行こうとしました。これに対し、オニアス家はユダヤ民族の伝統を守り、主なる神の民として律法を遵守すべき、という立場でした。この両派の対立は中間期を通して続きます。トビア家が政権主流派であり、後のサドカイ派に繋がります。オニアス家は地方祭司、律法学者をリーダーとする人たちであり、後のパリサイ派、エッセネ派に繋がって行きます。

ヘレニズム化が進行するとともに、それに反発する方も強くなり、神殿祭儀、律法遵守を厳格に守るハシディームの運動が展開されるようになります。このハシディーム（敬虔主義）はヘレニズム文化に対し反感を持ち、後期ユダヤ教の伝統を墨守する人たちです。オニアス家の伝統を継ぐ人々のうちの左派とでも言えるでしょう。この流れがのちに反乱を起こした祭司ハスモンの子マッタティアに繋がって行きます。ハスモン王朝の下で発生したパリサイ派もこのハシディームの流れを汲む、と言えます。これら二つの流れ、即ち、トビア家の流れをくむ国際主義的傾向とオニアス家の流れを汲む敬虔主義的傾向は中間期の大きな流れとして脈々と続いています。ある意味では、主イエスの教えはこの二つを統合したものだということもできます。この２つの傾向についてはキリスト教成立後もキリスト教の中でいろんな形で現れます。

プトレマイオス朝の緩やかな支配の時代はそう長くは続きませんでした。プトレマイオスV世がわずか5歳で王位につくと、シリア王アンティオコスIII世（大王メガス）はマケドニア王フィリポスV世と組んで戦勝後のエジプト分割を密約し、ガザを占領。BC198にはガリラヤ北部パネイオンの闘い（第五次シリア戦争）でエジプト軍に決定的打撃を与えました。この結果、ユダヤはセレウコス朝シリアの支配下に入ります。しかし、エジプト占領までには至りませんでした。ローマが台頭してきたからです。大王メガスはカルタゴのハンニバルとも共闘し、ローマに対しますが、敗北し、BC188アパメイアの和議で戦争を停止します。しかし、多額の賠償金を支払うとともに息子のアンティオコスIV世エピファネスをローマに人質として差し出すという屈辱的状態になります。彼は、エジプトとの戦争に協力したユダヤに対しては寛容な態度をとり、大祭司中心の自治も許容していました。しかし、大王メガスの死後あとを継いだセレウコスIV世は財政再建のためエルサレム神殿の宝物に手をつけようとしましたが失敗します。そして、ローマに対しては自分の息子で後のデメトリオスI世を人質に差出し、弟のエピファネスを解放してもらいます。彼が暗殺された後、このアンティオコスIV世エピファネスがシリア王となり、この王がユダヤ人への大迫害を行います。

この時期、ユダヤ等パレスチナ地域はエジプトとの経済交流などで巨万の富を蓄積するものも現れ、商業資本階級が形成されていきました。その代表が先に申し上げたトビヤとその一族です。このトビヤの由来はネヘミヤの敵対者でアンモン地方の有力者トビヤであろうと推測されています。この一家はギレアドを拠点に、エジプト王朝の好意を得てシリア南部の徴税権を得るまでになっていました。AD1cの歴史家ヨセフスの著作のなかで悪人のように描かれでいます。伝統的に大祭司の家系であったオニアス家と対立し、ヘレニズム派と伝統派の対立としてユダヤ社会を分断していきます。貧富の差が大きくなっている様子は「伝道者の書」などからうかがい知ることができます。エジプト、シリアの支配時代には大祭司とゲルーシア呼ばれる長老議会が宗教的・政治的統治を行っていましたが、このゲルーシアが後のサンヘドリン（最高法院）の先駆けではないかと思われます。また、この体制が、カルヴァンのジュネーブ統治の範となっているのかもしれません。

大問題が発生したのは先に述べたアンティオコスIV世エピファネスです。彼はローマの人質のあとアテネで生活しており、ヘレニズム文化の心酔者であったとされています。彼は即位するとすぐ、ユダヤに対するヘレニズム化を強化します。ユダヤ人内部では親ヘレニズム派と伝統派の対立が深まります。BC175にはツァドク家に属するが親ヘレニズム派であったヤソン・ヨシュアがシリヤ王に多額のわいろを贈り、伝統派の兄の大祭司オニアスIII世を退位させ、大祭司の地位を得ました。エルサレムをギリシャ風ポリスにすべく、若者にギリシャ風の着物を着せ、ギリシャ的教育を行い、競技場で裸で競技をさせるようなことをさせました。BC172にはヤソン以上の賄賂によって、今度は大祭司の家系ではないメネラオスが大祭司になる、というようなことまで起きました。彼の支持者は資本家のトビヤ家です。退位させられたオニアスIII世がダニエル書9:26の「油注がれた者」である、との説もあります。当時のエジプト王プトレマイオスVI世フィロメトルはエピファネスに挑戦し、第六次シリア戦争になります。この際中に、大祭司職をめぐってヤソンとメネラオスの争いが再燃し、エピファネスはエジプト遠征を中止し、ヤソンを追い払い、エルサレム神殿の財宝を略奪しました。翌年BC168に再びエピファネスはエジプト遠征をしますが、ローマの干渉で撤退せざるを得ませんでした。その帰りの途中で、エルサレムで掠奪を行い、町を破壊しました。更に翌年BC167には伝統的な宗教的寛容策を完全に捨て、徹底的ユダヤ教否定を命令しました。律法の書を焼くこと、律法に従う生活を禁止、ゼウス神を神殿に入れる、ユダヤ各地にギリシャ的神殿の建設を行いました。サマリヤにも同様の迫害を行いましたこれはユダヤ人が嘗て経験したことの無い程の大宗教的迫害でした。

なぜ、エピファネスはこのような迫害を行ったかについては諸説あります。ユダヤ地域以外ではこのような迫害がユダヤ人に加えられていないからです。一つはヘレニズム主義ユダヤ人主導説です。トビヤ家のようなヘレニズム派がシリア王の力を利用した、というものです。この考えに依れば、このあとのマカベア戦争は内乱ということになります。二つ目は反乱先行説です。ユダヤ人の反乱に対するシリアの弾圧という考えです。この考えでは、結局、ユダヤ人の反乱が成功しハスモン王朝が生まれた、ということになります。どちらも、どうも納得できません。エジプトに通じていた伝統派と一部ヘレニズム派に対する弾圧であり、対エジプト戦争の繋がり、という考えはなりたたないのでしょうか。いずれにしろ、このエピファネスの宗教弾圧はハシディーム派の多くを殺害しました。この逆境のなかで死者の復活という観念が明確な形ででてきた、といわれています。ダニエル書12:2-3、第二マカバイ書7:9等です。敬虔なる者が死んで、主なる神はそのようなことを放置するはずはない、という理解に由来するものです。

本来、イスラエルの信仰はイスラエル共同体と主なる神との関係で出来上がっており、イスラエルの各個人はこの信仰集団の一員としてのみ意味がある存在、ということでした。この共同体の指導者は共同体を代表するものであり、指導者の犯した罪は共同体全体の責任とされます。また共同体の民に蔓延した罪は、その指導者の罪と同一視され、指導者に罰が与えられます。死については、イスラエル信仰は肉と霊は一体であり、個人の肉体的な死は、その子などを通して共同体のなかで生き続ける、という考え方です。従って、子を得ることは絶対的に必要なことであったのです。ところが、このヘレニズム時代に入り、ユダヤ共同体が分散し、またエルサレムにおけるユダヤ共同体も分断され、肉体的に死んだ者はどの共同体の一部として生き続けるのかが確たることが言えなくなってしまいました。その結果、個人として生きる、死ぬという見方が出てきて、エピファネスの不条理の下で亡くなった個々人は主なる神が復活させてくださるはずだ、という希望の確信化としての信仰になって行ったのだと思います。共同体に埋没していた個人がその共同体が不確実化するに伴って、信仰の主体として登場するようになった、ということです。この後、個人と共同体の関係は神学上の一大テーマとなります。しばらく時代が下がり、復活を信じないサドカイ派とそれを主張するパリサイ派の対立点の一つになります。モーセ五書所謂トーラーには個人の復活という考えは現れていません。

エピファネスの宗教弾圧を契機に伝統派の反乱が起きます。エルサレムの西北の小さな町モディンの祭司でハスモン家に属するマタティア（マッタティアスとも言う）が異教祭儀を強要した役人とそれに応じたユダヤ人を殺し、5人の息子とユダの荒野に逃れて抵抗を開始しました。第一マカバイ書に詳しいです。ゲリラ戦を展開し、この反乱はユダヤ全土とサマリアの一部に広がりました。マタティアが死ぬとそのあとは三男のハンマーの意味のマカバイオスとあだ名されたユダ・マカベアが反乱の指揮をとります。1年以上の闘いの結果、シリア軍を次々破りました。このころ、シリア本国ではパルティアの進出を抑えるべくエピファネスは遠征に出ます。結局パルティアに負け、帰国途中でエピファネスは病で死にます。留守を預かっていた摂政リュシアスはユダヤに進軍しますが、エルサレムの南ベトツルでユダヤ反乱軍に敗北します。これでシリアのユダヤ支配は決定的に崩れます。ユダはエルサレムに進軍し、BC164、12月14日、神殿再奉献の儀式を行い、伝統的なユダヤ教の礼拝を復活します。この日は「ハヌカ祭」として、今でも重要な年中行事が執り行われています。ユダヤ暦キスレブ月9月の25日から8日間祝われます。光の祭りとも言われます。子供はお小遣いをもらえ、ポテトのパンケーキを食べ、ゲームを楽しんだりする時ですので、この日を楽しみにしています。キリスト教のクリスマスに近い日ですので、その影響を若干受けているかもしれません。

その後もセレウコス朝シリアとハスモン家を筆頭にするユダヤ反乱軍の闘いは続きます。摂政リュシアスは幼いアンティオコスV世エウバトルを戴きながらユダヤに遠征します。シリアは有利でしたがシリア本国でパルティア遠征軍の将軍であったフイリポスが覇権を確立するためアンティオキアに向かっている、という情報が伝えられます。このため、リュシアスはユダと和解し、ユダヤ教禁教令を撤回し、帰国しました。そして、ヘレニズム派の大祭司メネラオスは処刑されます。しかし、BC162、ローマの人質とされていたデメトリウスはローマを脱出し、アンティオコスV世と摂政リュシアスを倒し、デメトリウスI世ソーテールとして即位しました。そして再びユダヤに干渉し、処刑されたメネラオスに代えツァドク家のアルキモス（ユダヤ名ヤキム）を大祭司とします。ハスモン家の皆はこの大祭司を受け入れなかったため、シリヤ王ソーテールは軍を派遣します。ユダ・マカバイはこれを向かい打ち、エルサレムの北アダサで派遣軍の将軍ニカノルを戦死させました。この前後に、ユダはローマと同盟を結んだ、と言われています。

シリア王デメテリオスI世ソーテールはBC160、将軍バキデスを派遣しました。バキデスはエラサの闘いでユダ軍を破り、ユダ・マカバイは戦死します。このあとは弟ヨナタンがユダヤの荒野に引いて困難な戦いを続けます。そうこうしているうちに、大祭司アルキモスが死に、バキデスはシリアに帰ったためユダヤには束の間の平和が戻りました。しかし、ユダヤの親ヘレニズム派はシリアに軍を送ってくれるよう要請し、再びバキデスが来てハスモン家と戦争になります。ヨナタンは健闘し、和を結ぶことになります。その後、BC153、デメトリオスI世はアレクサンドロス・バラスというアンティオコスIV世の遺児と称する人物との内部対立のためユダヤを味方につける必要が発生し、ヨナタンに捕虜を返し、独自の軍隊を持つことを認めました。バラスもヨナタンに接近し、空位となっていた大祭司の地位をヨナタンに与えました。ヨナタンは最終的にバラスに組することになります。バラスはデメトリウスI世と戦い戦死させ即位します。ヨナタンには「将軍」兼「地方長官」の地位も与えます。ヨナタンはシリア王権と結びつき、その属国として、政治的・宗教的指導者となります。アロン系のツァドク家に属しないハスモン家のヨナタンが王と大祭司を兼ねる、という伝統派からすれば許されないことでした。エッセネ派の一部と目されているクムラン教団の死海文書には「義の教師」と対立する「悪しき祭司」というのが登場しますが、それはこのヨナタンを指すとする説があります。敬虔主義のハシディームの流れの者たちの反発を受けました。ヨナタンはシリアでデメテリオすI世の遺児と称するデメトリオすII世がバラスと対立した時、バラスを支えたことの褒美としてユダ王国の西に位置するエクロンを獲得しました。しかし、再度デメトリウスII世とバラスの対立が発生し、バラスが敗れると、デメトリウスII世に贈り物をし、大祭司の地位を確認してもらい、かつサマリヤ南部を獲得し、ユダヤ全土における免税特権を獲得しました。更に、シリアの内紛バラスの遺児わずか2歳のアンティオコスVI世エピファネス・ディオニソスを戴いていたシリアの将軍トリフォンに寝返り、兄シモンともどもヤッフォなどのある海岸平野の支配を獲得しました。しかし、トリフォンはヨナタンを警戒し、BC142年に計略で殺します。そしてアンティオコスVI世をも殺害し、自らシリア王となります。

ヨナタンに代わって王となった兄シモンはトリフォンに対抗してデメトリウスII世との同盟を復活し、大祭司の地位も承認させ、自治権を確立しました。BC141、シリア軍の「最後の拠点エルサレムのアクラ（城砦）からシリア守備隊を追い出し、ここに宮殿をたてました。この年をユダ王国の独立とされています。BC587以来ほぼ450年ぶりの独立国家です。これをハスモン王朝と言います。

イスラエル、ユダにおける、王、大祭司、預言者の関係は一言では言い得ません。サウル王がサムエルに指名されるまでの過程をみると、聖書記者の王制に対する警戒的姿勢が見て取れます。王は主なる神の僕の意識を失い、自らを神の代理人として権力をふるうようになることへの警戒です。またモーセとアロンの分業のように、政治的指導者と祭司のトップは別の人物であるのが当然の前提です。預言者はモーセのように民を導く者であったり、サムエルのように王を指名する者であったり、イザヤ、エレミヤのように王に忠告や警告を与える者であったりします。このうち、王と大祭司の関係は重要です。国家はその道義性を弁証するため宗教を味方につけようとします。そして王を神の権威で正当化するのです。この二つの兼務は許されません。ヨナタン、シモンはこの禁を破ったことになります。預言者も兼務はありえません。批判的見地を失うからです。一寸、近代の三権分立に似ています。権力の集中に対する警戒的姿勢は共通です。この国家と宗教の問題は大きな問題です。中世における王権と法権の対立、ルターの二王国説、宗教改革最左派のアナバプテストの国家への不信、イスラム社会におけるカリフ制、イラン革命以後の最高宗教指導者と大統領の関係、更には現在における政教分離問題まで、延々とした問題の系列です。世界で帝国と称せられた国々の宗教政策を比較してみると世界宗教のこの問題に対する特徴が見えてきます。現在のアメリカ帝国のようにその力の維持のために裸の暴力即ち軍事力に頼るしかなくなった時、帝国の没落が始まっています。

ハスモン朝はハシディームの流れを汲む伝統派から生まれていますが、世襲的専制君主に近い存在になるに従い、内部にいる多くのヘレニズム派に妥協を重ね、彼らを取り込み、自らヘレニズム派に近い立場になって行きます。ヘレニズムとユダヤ教の総合者としての役割を演ずるようになりました。ユダヤの伝統的思想は王はダビデの系列から、祭司はアロンの血筋のツァドク家からというものですが、ハスモン王朝はこのどちらにも該当せず、正統的信仰からは問題視されざるを得ませんでした。このことは逆にハスモン王朝が時に暴力的性格を表していきます。シモンは領土の拡張を進めますが、アンティオコスVII世がBC138に武力介入してくるなど未だシリアとの対立は続いています。シモンは息子のユダとヨハネに迎え撃たせこれを撃退しますが、BC134にはシモンの娘婿プトレマイオスがアンティオコスVII世と組んでシモンとその息子を暗殺する、という事態になります。これに対し、シモンの息子ヨハネが立ち上がりヨハネ・ヒルカノスI世として大祭司となります。

ヨハネ・ヒルカノスはアンティオコスVII世に人質を差出し、賠償金の支払いを条件に和解し、ユダヤの支配権を維持します。また、アンティオコスVII世のパルティア遠征に同行させられますが、その途上でアンティオコスVII世が死去する結果となり、ヨハネはユダヤ支配権を確実なものとすることができました。彼は、領土拡張に走ります。まず、トビヤ家支配のヨルダン川東のメデバ、サマガを征服し、ユダヤの南イドマヤを支配下に入れ、強制的に割礼を施し改宗させます。この地からのちのヘロデ大王がでます。彼は一応、ユダヤ教徒とされました。更に北に向かいサマリヤ地方に侵入しシケムを征服し、ゲリジム山のサマリア教団の聖所を破壊します。また後に、サマリヤを包囲、征服し、ユダヤの支配下に置きました。これは南北合わせたイスラエル王国回復を意味し、BC721に北王国滅亡以来のことで、約600年ぶりとなります。また、彼は貨幣の鋳造、外国人傭兵の雇用でも有名です。

当時の思想、宗教の状況についてはユダヤ人歴史家ヨセフスの『ユダヤ古代誌』に記述があります。ヨハネ・ヒルカノスは当初、パリサイ派に近かったようですが、彼らがヨハネの大祭司としての資格に疑義を示したためサドカイ派に転向した、と言われています。サドカイ派とパリサイ派はハスモン王朝成立のBC2c半ばに成立したものと推測されます。おそらく、ヨナタンが王と大祭司を兼任したことがパリサイ派が分離する契機になったと思われます。ハスモン家の支配はユダヤ民族主義ということで、ヘレニズム派と伝統派が一応まとまっていましたが、ヨナタンがツァドク家の血筋でないのに大祭司を名乗ったことに反発し、ハシディームの伝統を持つグループがパリサイ派（分離派の意味）として独立した、と理解できるのではないか、と思います。残った、権力を荷うグループがサドカイ派です。その名はツァドク家の名に由来すると言われていますので、ヨナタン、ヨハネを宗教的にツァドク家の系列に属する者と認めたのだろう、と思われます。両派の神学的対立点は、天使の存在を認めるかどうか、死者の復活を認めるかどうか、最後の審判という新しい考えを認めるかどうか、当時始まった口伝律法を律法の一部として認めるかどうか、でした。サドカイ派はモーセ五書に記述がないということでこれらを認めませんでした。政治的にはサドカイ派は権力追随であり、この源になる流れは、エジプト支配下ではエジプトに、シリア支配下ではヘレニズムに、そして後のローマ支配下ではローマに従属する、という姿勢でした。思想とか宗教の教理は二の次の態度です。ハシディームの流れの人は彼らと一緒にはやれませんでした。彼らは平信徒の律法学者（ラビ）を中心に一部の祭司と一般大衆にその教えを広めていきました。口伝律法はその後、「ミシュナー」としてまとめられ、律法解釈を体系化した『タルムード』の一部となって行きます。更にヨハネ・ヒルカノスI世の時代に「エッセネ派」が形成された、と考えられます。彼らは敬虔主義の極端な形で、修道院的生活によりこの世から断絶した生活を理想としました。この一部は完全な隠遁生活を求め、死海西岸の山岳地に移り住みクムラン教団を形成しました。現在『死海写本』として伝えられる文書が彼らの残した文書です。死海文書は1945年に偶然に発見され、世界中を驚愕させることとなった文書です。財産の共有、自給自足生活であり、宗教的には二元論的黙示思想でした。「義の教師」と「悪しき祭司」の対立が展開されている、とし、自らはこの「義の教師」の弟子としていました。この「義の教師」とはイエス・キリストのことではないか、と一時大騒ぎされたこともありました。実は、誰の事を指しているのかはわかりません。おそらく、「来るべき方」メシアを指しているのであり現実の人ではない、と理解するのが正しい、と思います。しかし、バプテスマのヨハネはクムラン教団に入ってはいなかったけれど、エッセネ派の一部であった可能性は濃厚です。隠遁的教理には賛同しなかったのだろう、と思います。彼らは神殿祭儀に批判的ですが教理的にはパリサイ派に近い考え方でした。このクムラン教団に対する批判と思われる箇所が新約聖書にもあります。このエッセネ派は最終的にはAD66年に始まったローマへの反乱である第一次ユダヤ戦争に参加し、完全に滅亡させられた、と言われています。それから、クムラン教団は当時一般的であった太陰暦に基づくユダヤ暦とは別に、太陽暦を使っていた点も注目に値します。

BC104にヨハネ・ヒルカノスは死にますが、彼は生前に妻を後継とするように定めていましたが、彼の息子アリストブロス・ユダは母を投獄し餓死させ、アリストブロスI世として即位しました。かれは、大祭司に加え正式に王の称号も得た最初の人物であったと言われています。それまでは、ユダヤ民族の指導者ではありましたが正式な「王」ではなかった、ということです。実質的にもエジプト、シリアから独立した国の体裁を整えたものと思われます。彼はガリラヤの地を征服し、ガリラヤ北部に住んでいたイトレア人に強制的に割礼を施し、改宗させました。ガリラヤがユダヤ教の地となって行くのはこれが契機です。主イエスの育った地、そして最初の宣教の地であるガリラヤは歴史的にはヤハウェ信仰とはかけ離れた異教の地でしたが、このときからユダヤ教の地となっていくのです。パリサイ派の積極的な宣教があったものと思われます。しかも、その信仰はゼロ―タイ（熱心党）と呼ばれるユダヤ民族主義的な反ローマ的なものとなっていくのです。

アリストブロスは1年で死に、そのあとは妻サロメ・アレクサンドラが、夫が牢屋に入れた弟を解放し、そのヨナタンと結婚します。これは聖書で定められているレビラート婚とみられます。夫が子が無く死亡した場合、妻はその兄弟と結婚して子を産む、というものです。この夫ヨナタンはアレクサンドリア・ヤンナイオスとして王位と大祭司の地位を受け継ぎます。彼は戦闘的でありかつ残虐な王として知られています。かつてのダビデ王国の版図を完全回復すべく軍事行動に出ます。最初はフェニキアの地のアコ・プトレマイオスを狙いましたが、住民がキプロスの支配者の援助を求めたため失敗します。しかし、彼は今度はエジプト王と同盟し、フェニキアの南のドルとストラトン、後のカイサリアを手に入れます。今度はヨルダン川東岸に向かい、ガダラ、アマトゥスを占領し、ガウラニティスと称せられる地域を支配下にいれました。この最北部がアンティオキアです。これはかつてのソロモンの支配地を超えるものでした。更には南方の死海東岸のモアビティス、エジプトに繋がるガザ地域も支配下にしました。そして軍事要塞を随所に設けました。

しかし、国内ではパリサイ派がハスモン家の大祭司職を認めて居ませんでした。ヤンナイオスは大弾圧でこれに対応しますが、悪循環的状況となり、ますます批判が強まりました。ヤンナイオスがナバテアでの戦闘に敗北するとファリサイ派による反乱が始まり、彼らはシリア王デメトリオすIII世に支援を求め、ついにヤンナイオスはシケムで敗北しました。しかし、デメトリウスIII世は自国で内紛を抱えていたため帰国。ヤンナイオスは体制を立て直し、パリサイ派の徹底弾圧を再開します。この時、十字架刑という残虐刑が導入されたとヨセフスは言っています。

ヤンナイオスはナバテア王アレタスIII世、シリア王アンティオコスXII世ディオニュソスとの戦いを継続しますが、遂にBC76(/78)に妻にファリサイ派との和解の遺言を残し死亡します。ヨハネ・ヒルカノス、アリストブロス、アレクサンドロス・ヤンナイオスのハスモン王朝三代によるイスラエル王国の領土回復はシリア、エジプトの両大国が内紛で本格的なパレスチナ地域への支配力を維持できないという国際事情によるものです。現在のイスラエル国家の膨張政策と比較してみるのも有意味かもしれません。事実、ユダヤ教最右派はハスモン王朝同様、ダビデ・ソロモン王国の回復を言っているのです。旧約聖書において十二部族に与えられた地を回復する、という理屈です。歴史に示された神の御意志の変化に対し全く目をつぶる者です。ユダヤ教もキリスト教も歴史は繰り返す、というような考えは採りません。特にキリスト教は主イエスの受肉によって新しい神の約束が示された、という考え方です。ユダヤ教にしてもイザヤ、エレミヤの預言の時代を経て、離散の民を救うメシアを待望する希望に生きるというものですから、モーセ、ヨシュアの時代に戻り、ハスモン王朝の範にならう、というようなものが正統な信仰であるはずはありません。わたしは、こんな調子が続くと、アメリカの勢力が衰えたどこかの時点で、イスラムの報復が始まるのではないか、と危惧しています。

ヤンナイオスの死後は妻のサロメ・アレクサンドラが王位を継ぎます。大祭司には長男のヨハネ・ヒルカノスII世をたてます。そして次男のアリストブロスII世を権力から遠ざけました。これがのちの抗争の火種になります。サロメ・アレクサンドラは遺言通りパリサイ派と和解しました。そして、夫の支配地域を良く守りました。イスラエルの歴史の中では、列王記記者からくそみそに言われている北王国オムリ王朝二代目のアハブの妻イゼベルとの子で南王国ヨラムに嫁いだアタリヤが短期間女王として南王国を治めた時期がありますが、ダビデ王朝の支配地に匹敵する広大な地域を治めた女帝はこのサロメ一人です。母が王位にあるうちはなんとか持ちこたえたのですが次男のアリストブロスII世は不満をつのらせ、サドカイ派と手を組みます。母の死後、大祭司である長男ヒルカノスII世が王位を継ぎますが、アリストブロスは反乱を起こします。結局このアリストブロスが大祭司と王の位を奪います。ヒルカノスII世はナバテア王のところに亡命し、再起を期します。しかしこのプロセスを仕組んだのはイドマヤ総督アンティパトロスであり最終的には自らがユダヤ王国の支配を獲得するつもりであった、と考えられています。ここにのちのヘロデ大王に至る道筋が引かれました。

ナバテア王アレタスはヒルカノスII世を引き連れ、エルサレム攻撃に向かいもう一歩でアリストブロスを敗北させるところまでに至りましたが、ここでローマの介入が始まります。ポンペイウスの腹心アエミリウス・スカウルスはアリストブロスの正当性を確認するということになり、ヒルカノスII世達は撤退し、逆にアリストブロスとその支持者によって追われる身となりました。BC63にこの地に入ったポンペイウスはアリストブロスの独立的態度に反発し、エルサレム神殿を包囲するという行動に出ます。この時、ポンペイウスは神殿の至聖所に足を踏み入れるという暴挙を行い、神殿破壊を行いました。アリストブロスとその息子はローマに送られ、ヒルカノスII世は大祭司の位は認められたが王位は認められず、「民族統治者（エトナルケース）」の名のみ認められました。そしてユダヤの支配地を大幅に縮小し大祭司の下での自治は認めるがその他の地域はローマのシリア総督スカウルスの支配下におきました。ユダヤの支配地域はユダヤ、イドマヤ東部、ヨルダン川東部ぺレアそしてガラリヤです。サマリヤはその支配地には入りませんでした。主イエスの時代、ガリラヤが飛び地のようにユダヤの一部とされるようになっていたのはこの結果です。

BC57年ローマに捕まっていたアリストブロスII世の息子でユダヤに潜伏していたアレクサンドロスはシリア総督に反乱を起こしました。ローマは将軍マルクス・アントニウスを派遣しこの乱を鎮圧します。このアントニウスが後にローマの第二回三頭政治の一人となる人物です。エジプトのクレオパトラVII世と結んでオクタヴィアヌスと大ローマを二分した人物です。クレオパトラはあの絶世の美女と称せられたあの人物です。反乱平定後、ヒルカノスII世の政治的実権を大幅に縮小しました。しかし、ユダヤの反抗は収まりませんでした。なんとローマで捕囚のもとにあったアリストブロスII世とその子マタティアス・アンティゴノスがローマ脱出に成功し、ユダヤに戻って復権をはかりました。シリア総督ガピニウスはこれを平定しました。しかし、ガピニウスがエジプト内戦に介入している間にアリストブロスII世のもう一人の息子アレクサンドロスが反乱を起こし、ガピニウスはイドマヤ王アンティパトロスII世にこの反乱を鎮圧させました。ガピニウスは再び大祭司支配のユダヤを認めますが、パルティアとの戦闘などに忙殺され、BC54にはローマに帰ります。このあとシリア総督となったのが第一回三頭政治の一人クラッススです。彼は戦費調達のため神殿の宝物を略奪したと言われています。彼が戦死したのちにシリア総督となったのは後にカエサルの暗殺者の一人となったカシウス・ロンギヌスで、ガリラヤ地方での反乱を鎮圧し、3千人のユダヤ人を奴隷として売りとばしたとヨセフスは言っています。ヒゼキヤの乱、と言われている反乱と思われます。ユダヤ人の反ローマ的態度はこの当時から極めて根強く続いています。なかでもガリラヤの地は反ローマの巣窟のような地域でした。主イエスの時代にもそのような機運は根本にあったものと思われます。

BC49ころローマではカエサルとポンペイウスの対立が顕在化していました。カエサルはローマで捕囚にあったアリストブロスII世を利用しようとしましたが、ポンペイウス派に毒殺されてしまいます。息子のアレクサンドロスも斬首されます。BC48年カエサルがポンペイウスを破ると、親ポンペイウスであったヒルカノスII世とその後見人とも言うべきイドマヤ王アンティパトロスII世はエジプト遠征をしていたカエサルに援軍を送り、カエサルの好意を獲得し、カエサルはヒルカノスの大祭司、民族統治者の地位を確認しました。宗教の自由、独立した裁判権、エルサレム神殿城壁再建、免税・徴兵の特権も与えました。しかし、その実権はイドマヤ王アンティパトロスが握っており、彼は長男のファサエロスをエルサレム知事に据えました。そして次男ヘロデをガリラヤの知事としたのです。BC44、カシウス・ロンギヌスが再度シリア総督に就任するとアンティパトロスはユダヤに重税を課し総督の意を得ようとしますが、ここでもユダヤ人は反乱をおこしました。しかし、ファサエロスとヘロデは協力しこの反乱を鎮圧しました。BC42、カシウスがアントニウスとオクタヴィアヌスの連合軍に敗北すると、ヘロデは第二次三頭政治の一人アントニウスに接近します。そして兄ファサエロスとともにユダヤの四分領主（テトラルケース）として認めさせます。そしてオクタヴィアヌスが支配権を確立するやヘロデは彼に取り入るのです。

BC40、パルティアの王子パコロスがシリアに侵入し、ユダヤの地も危ない状態になった時、アントニウスは有効な手を打てず、その間にアリストブロスの息子マティアス・アンティゴノスがパルティアの支援をうけて、ヒルカノスII世とファサエロスを捕縛し、自ら大祭司と王即位の宣言を行いました。ヘロデはからくも逃れ、一族をマサダの要塞に匿った上、ローマに出向きアントニウスとオクタヴィアヌスに応援を願い出ます。ローマ元老院はヘロデを「ローマ人の友にして同盟者」としてユダヤ王と認めます。BC39年、シリア総督バッススがパルティア人を撃退し、その機にヘロデはプトレマイオス（アコ）からユダヤに上陸し、支配権の奪還を狙います。当初は、アンティゴノスの反撃にあったりでうまく行きませんでしたが、BC38、新任のシリア総督ガイウス・ソシウスの支援をうけてエルサレムを占領するに至ります。アンティゴノスはアンティオキアに送られ斬首されます。ここでハスモン王朝は滅びることとなります。しかし、ヘロデはハスモン王朝の継承者を演ずるため、アンティゴノスの兄弟アレクサンドロスの娘マリアンメI世を妻とします。しかしヘロデはイドマヤの強制改宗されたユダヤ教徒であり「半ユダヤ人」に過ぎません。ユダヤ人の中にはその正統性を否定する者も多く居たにちがいありません。ヘロデはエルサレム神殿の修復・拡張などを行い、ユダヤ人の歓心を得ることをしました。この神殿は第三神殿と呼ばれることもあります。このヘロデは大王として有名ですが権力に挑戦しそうな親族等を多数殺害したことで有名です。その様は曽野綾子の『狂王ヘロデ』に詳しいです。しかし、この時期のイスラエルの地は比較的平穏であったことは事実です。BC4の大王の死後、その後継者の間でローマの従属者としての争い発生し、その中で反乱がまた起き出します。

以上のようなハスモン王朝の権力闘争を見てみると、大国に振り回される小国の悲哀みたいなものがあります。これが内部対立を激しいものにし、共同体が激しく分断されるようにもなるのです。この歴史の中から何を見るかは人それぞれで異なるでしょうが、主イエス・キリストに従う者は政治の世界にどう臨むべきかを考えさせられます。